和　の　心

校長　佐々木　秀之

「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉のとおり、うだるような暑さはいつの間にか爽やかな風へと変わり、虫の声の便りが聞かれるようになってきました。先日、廊下を歩いているとき、5 年生が国語の時間に「敬語」の学習をしていました。

＊

日本のよさには、人を敬う心があります。敬語は相手や目上の人に不快感を与えずにコミュニケーションをとる日本文化のよさです。それは相手に対し、敬意を払い、控え目に振舞おうという心の表れでもあります。

礼儀正しさや思いやりの心も日本人のよさと言われています。「おもてなし」はその表れで、世界中から評価されています。「もてなし」の語源は「モノを持って成し遂げる」という意味です。もう一つの語源は「表裏なし」です。つまり、家族同様見返りを求めない表裏のない「心」でお客様をお迎えするという意味になります。茶道の世界では、「お客様」をおもてなしする際に、季節感のある生花、お客様に合わせた掛け軸、絵、茶器、匂い（御香）など具体的に身体に感じ、目に見えるものを「モノ」と言い、瞬時に消えてしまう言葉、表情、仕草など、目に見えない心を「コト」と言うそうです。

自然への畏敬の念も日本のよさです。日本の風景は、四季の移り変わりによって変化します。それを私たちは五感で感じ取り、楽しんできました。五感を使うことにより、豊かな想像力をはぐくんできました。

年上の人に礼を尽くし、尊敬の念を抱くのはもちろんのことですが、年齢差を問わず、常に人を敬う気持ちでいることは大切なことです。彼の松下幸之助は「親を大事にし、上司に敬意をはらう。先輩に礼を尽くし、師匠に懸命に仕える。親や師に対するだけではない。よき仕事をする人を心から尊敬し、一隅を照らす人にも頭を下げる。天地自然、この世の中、敬う心があれば、敬うに値するものは無数にある」と述べています。

＊

「和の心」を大切にし、人を敬う気持ちでいると、「謙虚な気持ちでいられる」「人から学ぶことができる」「感謝の気持ちをもつことができる」「信頼を得られる」「人間関係がうまくいく」そうです。なにか良いことばかりですね。心は見えなくても、心遣いは見えます。人・物への心遣いがあふれる学校にしたいと考えています。